

1. 未曾有の大地震を体験して思ったこと

新住協事務局長 会沢 健二

*この手記は3月18日に記したものです

大災害

あの大地震から一週間が、あっという間に過ぎました。今日はもう8日目です。私の住む場所は若林区で、区内の荒浜というところで200~300人の遺体が上がったとの報道が早い段階で報道されたこともあり、地震後、多数のメール電話を携帯に載きました。ただ、その時は既に通信環境が悪く着信を見るだけで返信不能な状況だったので無地を返す知らせることはできませんでした。

私は家族共々幸いに難を免れ、家屋の損傷もなく、今は散乱した家の中もほぼ片付き、水も電気も通じ、使う気になれば普段通りに使える環境にまで復旧しています。欲を言わなければ食べ物の不自由もありません。

勿論、仕事場である事務所はメチャクチャでその建物に戻れるかどうかもわからない状況ですから、私たちも被災者といえば被災者かも知れませんが、テレビに映し出される海岸の人々と破壊された街や家々をみたらとても被災者とは言えません。

電気が通じたのは地震後4日目でした。そこで初めてテレビを見ることができ、被害の実態を目の当たりにし、まさに驚愕でした。南三陸も石巻も仙台港も、名取も亘理も、ヘリコプターから撮られた上空からの写真は地理に憶えのあるよく知った土地ばかりです。ところが、あるべきところに家がありません。建物が消えています。道路も林もありません。私はただただ呆然として画面をみつめていました。日を追って、被害の大きさが凄まじいばかりの映像になって流れてきました。そこに住んでいた何百何千何万という人たちの行方は一体どうなってしまったのでしょうか。

被災者支援について

避難所の様子がテレビに映されています。住む家ばかりでなく、この後の生活の支えとなる仕事道具も何もかも失った人々、そこには、布団がない、毛布がない、食べ物も飲み物も、灯りもない、薬もなければ暖をとる灯油も暖房器具もないと叫んでいます。波に濡れたままの衣服をまとっているという人もいます。

私は、被災地の、避難所の、すぐ近くにいる今の自分に何ができるのか、何かしなくては、この人たちのために何もしないでいいのか。オロオロと気持ちまで右往左往しているのがわかります。時間がどんどん過ぎてゆきます。じっとしていることが悪いことをしているような気になって、正直のところ途方に暮れていました。

私はいたたまれずにそのことをそばにいる人に話しました。するとこんな言葉が返ってきました。「今の自分の仕事に精一杯の力を出すこと、それが、その人にできる被災者に対する最大の支援ではないか」。そう、たしかにそうだったのです。世の中のしくみはそうになっていたのです。なぜそんなことに気がつかなかったのか。胸のつかえがとれたように気持ちか楽になりました。

被災地はモノがありません、復旧にはモノが必要です。だから、生産に従事する者はモノを作ればよい。合板を作る、ガラスを作る、壁を作る、床を作る、流し台をつくる、それで仮設住宅を早くつくるのだ。食べ物も足りない。パンをつくれ、牛乳をつくれ、ご飯をつくれ、避難所に届けろ。ガソリンを作れ、重機を作れ、道路を直せ、電線をつなげ、電池を作れ、販売業者は店に並べろ、配送業者は消費者に届けろ、……！そう、社会に役立つ仕事とはこういうことをいうのだったとあらためて思いました。自分の仕事に専念せよ、それが被災者に対してできる何よりの後方支援になるのだ。そして、それこそ自分の仕事が社会に役だっている証なのだ、非常時のこの時に、実に単純な理屈ですが、社会に関わって生きているとはこういうことだったのだと今更ながら思いました。

停電—暖房無しのQ1.0改修住宅

翻って、私たち新住協の家づくりはどうでしょう。私は今回、自分の家で一つの確信を得ました。3年前に断熱耐震改修した我が家は、震度7の地震にほとんど無傷で耐えました。屋根も壁も、家具調度の類も被害は皆無に近いのです。一方、11日の地震後、その日から暖房を切りました。灯油の一滴も使わないで暮らすことにしたのです。(というより、停電で暖房が使えなくなったこともありましたが、何よりも避難所に凍える人を見て、全室暖房する心情にはなれません。それが仮に1日1~2日しか使わないとしてもです)そして今日まで1週間、暖房を止めたままです。この間、2日続いたみぞれ混じりの朝に室温が12℃位になりましたが、起きている間は15~16℃位になりますからちよつと着込めば寒くはありません。そして日が照ると室温は17~18℃に上がります。3月という時期もありますが、暖房なしでも支障なく暮らしました。高いレベルの高断熱住宅のお陰です。隣町に住む知人からも、暖房できない3日間の最低室温は14℃だったので灯油買いに走らないで済んだというメールが入りました。高断熱がもっと普及していたら、高断熱がもっと高レベルだったら、灯油パニックも起こらなかったのです。

新住協の家づくりについて

.....
しっかりした高断熱にこだわってきた私たち新住協の家づくりが、いざというときに大いに必要だったこと、大きく役立つことが証明されました。これこそが社会に役立つ立派な仕事ではないでしょうか。

原発はもっとも恐れていた事態に陥りました。もうオール電化がクリーンだと言う人はいないでしょう。エネルギー政策を原点から見直すときがきました。そもそも大切な電気を暖房に使ってはいけなかったのです。

私たち新住協が推進してきた超省エネ型高断熱のQ1.0住宅、それに太陽光給湯、太陽光発電をプラスした家づくり、これから向かうべき方向がはっきり見えたのではないのでしょうか。

今推進している断熱耐震リフォームも然り、基本はしっかりした高断熱です。

断熱にやりすぎはありません。Q1.0住宅を今こそ大きく推進しましょう。

2011/03/22 新住協事務局 会沢健二

関連コラム

1. 未曾有の大地震を経験して思ったこと
2. 地震発生後、連続10日間暖房を完全OFF、その時高断熱住宅はどうなる！
3. ヒートポンプによる暖房について
4. 私の地震予兆
5. 郵便による安否問い合わせ
6. 恐怖体験